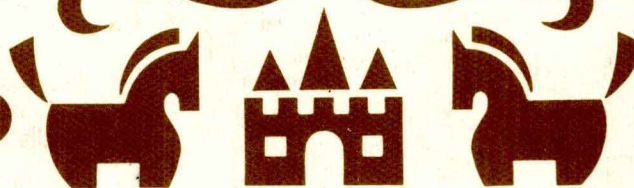




こどもの
世界文学



ラング, アンドリュー

こどもの世界文学 3 神宮輝夫 ほか 編集

かしこすぎる王子プリジオ ほか

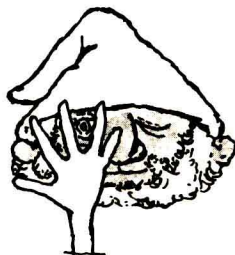
講談社 1972

238p 24cm

内容: かしこすぎる王子プリジオ

アーマッド王子と仙女バリバヌー

アンドリュ＝ラング



こどもの世界文学3

かしこ^{おうじ}すぎる王子プリジオ ほか

昭和47年7月16日 第1刷発行

定価 750円

作 者 アンドリュ＝ラング

訳 者 八木田宜子

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111〈大代表〉

郵便番号112 振替東京3930

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 図書印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan

8397-170035-2253 (0) (児1)





ウォークウォース城（イギリス）







こどもの世界文学

《イギリス編・3》

かしこすぎる王子プリジオ ほか



アンドリュー＝ラング作
八木田宜子訳

もくじ

かしこすぎる王子プリジオ.....9

第一章 仙女たちは、なぜ、ごてんにまねかれなかったか.....10

第二章 プリジオ王子は、みんなのきらわれもの.....22

第三章 火ふきりゆうの、おそろしいうわさ.....28

第四章 プリジオ王子、お城にひとりのこされる.....40

第五章 プリジオ王子は、屋根うらべやでなにを見つけたか.....50

第六章 グルックシュタインの町は大さわぎ.....53

第七章 プリジオ王子が恋をする.....67

第八章 プリジオ王子は、どうしたらいいか考える.....76

第九章 火ふきりゆう、まいあがる.....81

第十章 氷のかいぶつ、レモラ.....89

第十一章 火ふきりゆうとレモラのたたかい.....97

第十二章 プリジオ王子、思いがけない不運にみまわれる.....110

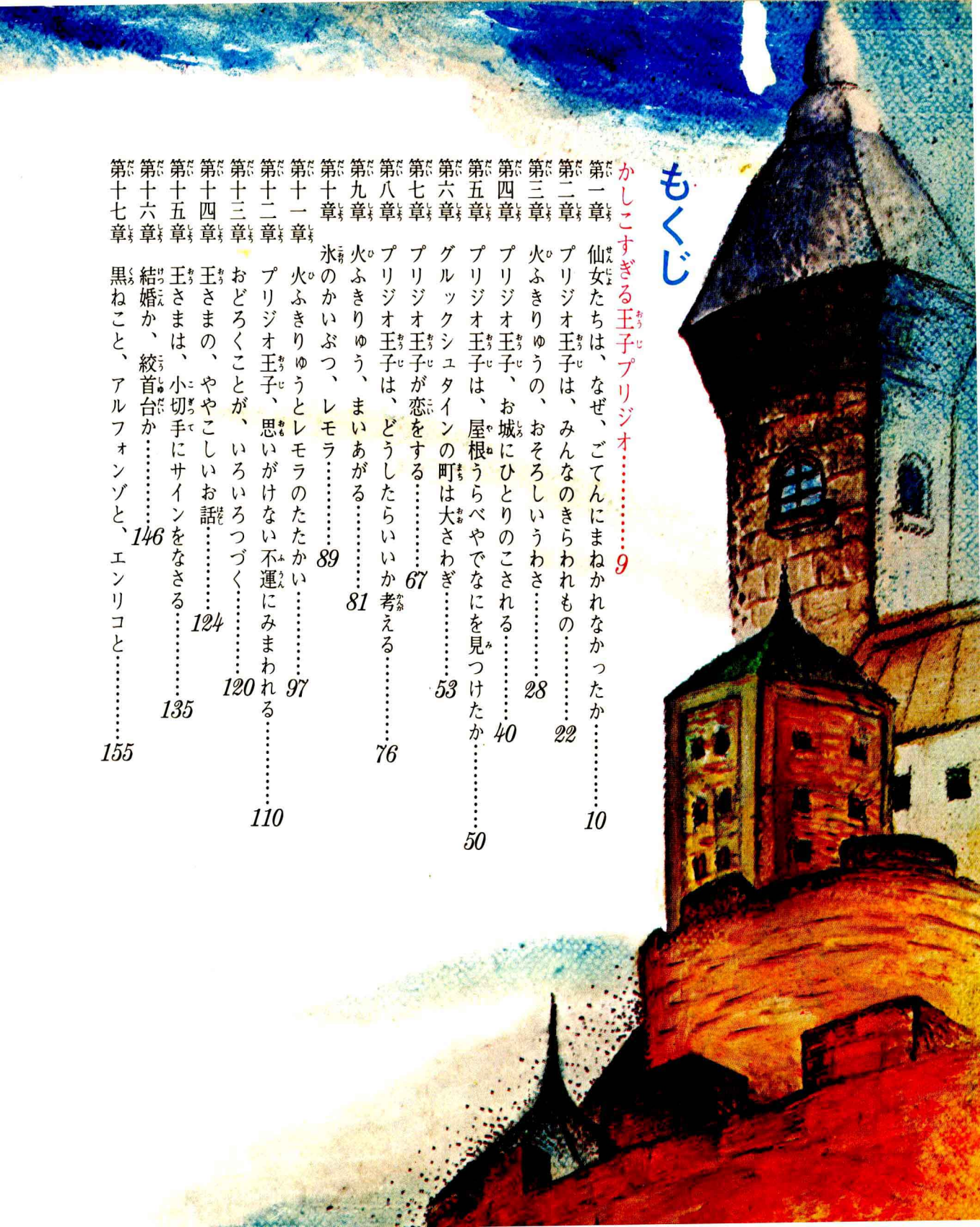
第十三章 おどろくことが、いろいろつづく.....120

第十四章 王さまの、ややこしいお話.....124

第十五章 王さまは、小切手にサインをなさる.....135

第十六章 結婚か、絞首台か.....146

第十七章 黒ねこと、アルフォンゾと、エンリコと.....155





第十八章 めでたし、めでたし……………173

アーマッド王子と仙女パリバヌー……………182

物語を読んだあとで

妖精の国のもの知りおじさん 八木田宜子……………220214

長い地下道のあるお城 メアリー・リード……………220214

世界の妖精物語 神宮輝夫……………222

「かしこすぎる王子プリジオ」の読書会から……………北川幸比古……………225

おかあさんのためのイギリス児童文学史〈3〉 八木田宜子……………240

訳者・画家の横顔……………234

《責任編集》

神宮輝夫

関楠生

安藤美紀夫

塚原亮一

(日本編)
鳥越信

装本 大橋正

扉 安野光雅

さしえ 松井豊

扉写真 井上宗和

かしこすぎる王子プリジオ ほか

アンドリュー＝ラング作

八木田 宜子 訳

松井 豊 絵



かしこすぎる王子プリジオ

第一章

仙女たちは、なぜ、ごてんにまねかれなかったか



むかしむかし、パントウフリアという国を、王さまとおきさきがおさめていらっしやいました。

この王さまとおきさきは、なんの不自由もなく、しあわせにくらしておいででしたが、たったひとつだけ、たりないものがありました。おふたりのあいだには、お子さまがなかったのです。

このことでは、おきさきよりも、王さまのほうが、心をいためていらっしやいました。おきさきは、とてもかしい、学問のおありになるかたで、子どもときでも、お人形なんかがおきらいでした。けれど、こんなおきさきも、どれだけ本をお読みになろ



うと、どれだけ絵をおかきになろうと、かわいい王子のおかあさまになれば、とてもうれしいとお思いになったことでしょう。

王さまは、しきりと、仙女（魔法のつかえる女の人）たちにそうだんしたがっておいででした。でも、おきさきは、そんなことには、耳もおかしになりません。仙女がいることを、信じていらっしやらなかったのです。おきさきは、この世には、仙女などというものはおりません、とおっしゃいました。「パントウフリーア王室史」は、「いない」もののことを書いた章でいっぱいなのに、おきさきは、そういいはっておられたのですよ。

さて、やっとのことで、とうとう王子さまがお生まれになりました。こんなかわいい赤ちゃんは見たこともない、というひょうばんでした。いつもは、まわりのもののことなど、ひとつもお信じにならないおきさきでさえ、たしかにかわいい子だわ——とでも、とても、かわいい子だわ、と、おみとめになったくらいです。

洗礼式の日が近づいてきました。王さまとおきさきは、ごてんの「夏の間」で、朝ごはんをめしあがりながら、洗礼式のこと、そうだんをしていらっしやいました。

「夏の間」というのは、とてもすばらしいへやで、ぐるりのかべには、王家のご先祖がたのしょうぞう画が、ずらりとかかっています。

シンデレラがいます。このかたは、いまの王さまのおばあさまで、ガラスのくつをは



いた小さな足を、前に出しています。

カラバ侯爵もいます。このかたは、時の王さまのおひめさまと結婚してから、おひめさまのおむこさんとして、王座にのぼりました。王座のかたわらには、侯爵のゆうめいなねこが、長くつをはいて、ひかえています。

また、ぐっすりねむっている、うつくしい女の人のしょうぞう画もありました。これは「ねむりの森の美女」で、やはり王家のご先祖にあたるかたです。

このほかに、いろいろなゆうめいなかたがたのしょうぞう画が、たくさんかべにかかっています。

「よばなければならぬ人たちは、みなよんだであろうな。」

と、王さまがおっしゃいました。

「およびしなければならなかつたがたは、ぜんぶ。」

と、おきさきがおこたえになりました。

「このようなときには、みな、気がたつておるからな。」と、王さま。「おばさまがたのことを、わすれはしなかつたであろうな。」

「わすれなんぞいたしませんわ。いやな、いじわるばあさんたち。」
と、おきさき。





